

## Pictorially yours,

大島 徹也（本展キュレーター／多摩美術大学准教授）

「Pictorially yours,」は、英文手紙の結辞「Sincerely yours」（敬具）と「pictorial」（絵画の）という英単語を、本展に際して合成した造語です（英語として通用するかはさておき、字面から意味を何となく感じ取っていただければ充分です）。本展はいわば、観客の方々に宛てられた一通の手紙のようなものとして構想されています。

現在 12 名の作家と 1 名の美術史研究者からなる「Studio 138」という芸術研究会（2019 年設立）があります。このたび、その Studio 138 の作家メンバーを主体とするグループ展のオファーが、表参道画廊から同研究会の方にありました。そこで、その 1 名の美術史研究者がキュレーターとなって Studio 138 の作家メンバーの中から 8 名を選び、「Pictorially yours,」展として彼らの仕事をご紹介する次第です（本展は、Studio 138 展ではありません）。

本展の出品作家たちの間には、全員が画家でありかつ上記の研究会のメンバーであること以外に、全体的な共通性は特にありません。世代的には 50 代が多いですが、30 代も二人入っています。また、皆いわゆる「抽象」的な画家ですが、その度合いや問題意識にはひとまとめにして扱い難い違いがあります。出品作家の中には、小池隆英や森川敬三のように、非対象の茫漠とした絵画空間を生み出す者もいれば、金田実生や中小路萌美のように、現実世界との視覚的関係性のある程度保持している者もいます。さらには、その小池と森川、そして金田と中小路の間にも、注目すべき差異があります。

小池は、ステイニングの技法を用いながら、色彩同士の関係という形式上の問題に集中します。そうして淡い色彩を重ね、微妙に色調を変化させながら、幽玄な抽象空間を創り出します。なお、通常小池は、観者の自由な見方に影響を与えないようにと、作品を無題にします。しかし今回は、珍しくタイトルを付けました。作品がほとんど完成した頃、他の本展出品作のイメージやそれらのタイトルにある「風」「夜」「瞑想」といった語を目にした時、それらの情趣に触発されて、ビル・エヴァンスの「A Sleepin' Bee」のムードが不意に彼の中にわき上がってきたといいます。本展出品作の《Sleeping Bee》というタイトルは、そこから付けられたものです（作品そのものとのそれ以上の関係性はありません）。他方、森川もステイニングによって描きますが、彼は一貫して、日本特有の湿度感のある風景を、抽象的に自身の心象風景化して表現しています。本展出品作《鳥たちの瞑想》は、同名の連作の一点です。

金田と中小路については、世界に対するそれぞれの向き合い方が、好対照をなしています。金田は、自然現象中に漂う気配や、外界に流れているエネルギーのようなものに関心を向けつつ、世界を彼女独特の柔らかな雰囲気包んで、詩情豊かに描き出します。本展出品作《ストライプの夜》では、本来静穏な休止の時間である夜が発する不思議な力を、ダイナミックで幻想的な抽象的ヴィジョンで表現しています。対して中小路は、彼女特有の視覚経験をきっかけに、彼女が目にする風景の構造へと迫っていきます。眼前の世界が一瞬、その形態の意味が判らずに不可解なものに見えることがあると、中小路は言います。そのわずかな間、彼女は、普段の意識では捉えられないが確かに存在する「別せかい」を見ていたのです。中小路はそのような視覚経験を通じて、世界というものの在りようをキャンバス上で絵画として探り直していきます。

吉川民仁と小川佳夫はともに、左官コテやペインティングナイフによる絵具のペインタリーな扱いを特徴としています。しかしながら、吉川がその鋭敏かつ繊細な感受性をもって、自分を取り巻く自然から創造のインスピレーションを豊かに得るのに対し、小川の仕事は、画家としての彼と、彼の人間存

在の内奥にある何か衝動的なものや情動的なものとの対峙を感じさせます。吉川は、彼の琴線に触れた光景や現象をいったん自分の内へと取り込んだのち、そのヴィジョンと情趣を油絵具の音色の響き合いによって表出していきます。吉川は、そうして出来てくるものに対して、「立ち会う」という感覚を作り手本人としてしばしば持つと言います。他方、小川の最後の一振りは、彼が向き合った内面的な何かを彼が確かに捉えた瞬間であるでしょう。最近では、小川は「光」というかねてからの自分の仕事のモチーフを再び強く意識してそれを前面化するようになっており、自らの模索に導きや救済をもたらす光明の表現を、最後の一振りに追求しています。

山口牧子と平野泰子は、支持体と絵具層の関係ないし構造に関して、それぞれ興味深い実践をなしています。山口は麻紙に襷を寄せ、所どころその裏面から表面へと絵具を滲み出させます。画面上では、いくつかの異なる色彩、その透明感と不透明感や絵具の薄さと厚み、また襷と襷あるいは襷と絵画平面が調和したりぶつかり合って、活力に満ちた空間が形成されます。《Earth Spirit – madder in blue –》(madder=茜色)と名付けられた本展出品作では、そこに、太古から続くこの世のさまざまな生命と、それらを生ぜしめ育む地球/大地の存在が重ねられているかのようです。平野は、キャンバスをパネルに張って石膏下地を施し、それをサンダーで入念に研磨します。そして、そのようにして得たフラットな画表面に何層もの異なる色彩をごく薄く塗り重ねる先に、崇高ささえ感じさせる深遠な絵画世界を生み出します。本展出品作では、そこに線描をいくつか加えてそれらの線を溶け込ませたり、表面上の一部に絵具を荒っぽく置くなどして、空間構造をより複雑化させつつ、全体の統一を果たしています。平野の絵画世界の根底には、一貫して「風景」があります。風景へと眼差しを向ける時、そこに何か不確かな存在や、名付けようのない現象を感知することがあると、平野は言います。平野はそれらに現実的強度を持たせようと、それらを捉えて絵画として表現していきます。

本展の8名の出品作家たちの仕事はこのように多様ですが、彼らに関してここでひとつ確かに言えるのは、この時代にあって彼らが、絵画の持つ力をなお深く信じ、絵画としての表現、絵画というメディアの新しい可能性をひたむきに探り続けているということです。これを本展のメッセージとし、本展に出品されたそれぞれの作品、そしてそれらが響き合う展示空間全体から、彼らの探求の意義を感じ取っていただけたらと思います。

本展の出品作家たち8名は、たとえば我が国のあちこちの都市や村で盛んに開催されてきている大型の国際芸術祭などとは無縁の者たちです。彼らの仕事には、そういった企画で重宝がられるような派手さも、物理的インパクトも、大掛かりなプロジェクト性も、観客参加性も、地域社会との連携性もありません。ただ一枚の絵画を、自分の納得のいくまで描き通すこと。その積み重ねに己の生と無上の幸福を見出し、そして、そうであるがゆえに、時に激しく苦悩もする。そんな彼らの絵画を、私は本展キュレーターとして誠実に表参道画廊の壁に掛けたいと思います。

Pictorially yours,

*Tetsuya Oshima*

Pictorially yours,

2021年11月1日(月) - 13日(土) 12:00-19:00 (日曜休廊/最終日17:00まで)

表参道画廊

キュレーター：大島徹也

出品作家：小川佳夫、金田実生、小池隆英、中小路萌美、平野泰子、森川敬三、山口牧子、吉川民仁

企画：表参道画廊

問合せ先：pictoriallyyours@googlegroups.com